

アジアの風

第5号

2002年7月31日発行

題字：宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター

2004年アジア児童文学大会に向けて

6月14日 名古屋市で第1回実行委員会準備会開く

『アジアの風』第4号で、第7回アジア児童文学大会（2004年）のための第1回実行委員会を4月に開催する予定であることをお知らせしましたが、その後、実行委員会を今立ち上げるのは時期尚早であるとの意見もあり、当面、実行委員会を立ち上げるための準備会を進めて行こうということになりました。

その第1回準備会が去る6月14日（金）、13時30分から名古屋市鶴舞中央図書館会議室で開かれました。名古屋市からは市民経済局文化観光部・文化振興室長の平岡研二氏、名古屋市鶴舞中央図書館の牧野副館長、（財）名古屋市文化振興事業団の飯田総務部長が出席され、富山県大島町からは絵本館館長の高井進氏と岡本事務局長が出席されました。日本児童文学者協会国際部長中尾明氏も東京からかけつけてくださいました。しかた・しん会長の挨拶に続いて、出席者紹介、議長選出が行なわれ、しかた会長が議長に選ばれて早速議事に入りました。主な議題は大会の基本テーマ、日程・プログラム、ならびに予算等で、このうち大会日程については2004年8月4日（水）～8月9日（月）という案が了承されました。大会テーマについては、『児童文学の将来像を探る』《共生の時代に生きる子どもたちに向けて》という内容はほぼ了解されたのですが、具体的な文言については結論に至らず、センター事務局で再度練り直すことになりました。なお大会予算については総額1000万円の予算案が提出され、基本的に了解されました。ただし補助金については今後さらに細かく打ち合わせを重ねていかなければなりません。

この第1回準備会の結果に基づき、来る8月21日から大連市で開かれる第6回アジア児童文学大会において、第7回大会の主権を宣言、了承を得ることになります。なお第2回準備会は10月17日に開かれる予定です。

大連大会近づく——東京と大阪で大会参加者の集い

中国遼寧省大連市で開催される第6回アジア児童文学大会が近づいてきました。今回は日本からの参加者が40名を数え、初参加の人も多いので、出発前に顔合わせや簡単な勉強会が必要になってきました。

東京では6月16日に、河野孝之氏のお世話で大会参加者の集いが開かれました（日本児童文学者協会事務局）。これにはしかた・しん会長も出席、今回の参加者の方々を中心に今後当センター東京支部として活動し、2004年の大会を盛り上げてくださるようお願いし、了承されました。

関西と中部の参加者の集いは、成實朋子氏のお世話で7月28日午後、大阪市の府立労働センターで開かれ、参加者の顔合わせ・打ち合わせを行うとともに、皆さんが2004年の大会に対して積極的に協力してくださるようお願いをしました。

アジアの子どもの本まつり 好評裡に終了

アジアの子どもの本まつり「子どもの本からアジアを見る」は、去る4月23日から28日まで名古屋市民ギャラリー矢田と名古屋市立東文化劇場で開催され、好評裡に終了しました。

展示「アジアの子どもの本」には、6日間に計266名の入場者があり、4月27日、28日のイベントにも熱心な方々が参加されました。当日の様子や反響については、次の2頁からをご覧ください。

子どもの本からアジアを見る

展 示 名古屋市民ギャラリー矢田

4月23日～28日 9:30～19:00

《展示内容》

I. 日本で紹介された中国・韓国などの本

1980年代以降に日本で翻訳出版された中国・韓国などの図書42点。そのうち17点については、中国語・ハングルの原書も併せて展示。

II. それぞれの国や言語の本

中国、韓国、タイ、フィリピン、マレーシア、シンガポール、インドネシア、ヴェトナム、インド、台湾、香港など9か国2地域の子どもの本、計54点を展示。

III. アジアを描いた日本の本

乙骨淑子「びいちゃあしやん」、前川康男「ヤン」、赤木由子「二つの国の物語」、しかた・しん「国境」など、アジアの国々を舞台にした日本の作品15点を展示。

IV. 「野間国際絵本原画コンクール」入選原画

ユネスコ・アジア文化センターのご協力を得て、原画パネル12点（イラン、韓国、マレーシアの画家の作品）を展示。

V. 関係団体・機関の紹介

会場の一角に関係団体・機関の紹介コーナーを設け、ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）、日中児童文学美術交流センター、大阪国際児童文学館、並びにアジア児童文学日本センターを紹介。

《入場者の感想～アンケート結果から》

- ◇ 今回かなり多くのアジアの作品が存在することにおどろきました。もっといろいろな面で紹介されるとよいのに、と思いました。日本はアジアの一員なのですから。（30代）
- ◇ 同じアジアでも、こんなにさまざまな本が出ていて、おどろきました。本を通してお互いの文化を知ることができて、アジアをとっても身近に感じることができました。（20代）
- ◇ 会場が広く、少し寂しく思いました。（20代）



- ◇ 最近、児童書でアジア（特に韓国）の本を目にすることが多くなりましたね。子供の時から自然に他の国の本を読んでその背景を理解できるようになってくれればと思います。（40代）
- ◇ 今回は時間がなかったのでしょうが、展示本に簡単なコメントをつけたり、関連資料を用意してほしいと思いました。会場が広すぎて、展示が少なく感じられたのが残念でした。（40代）

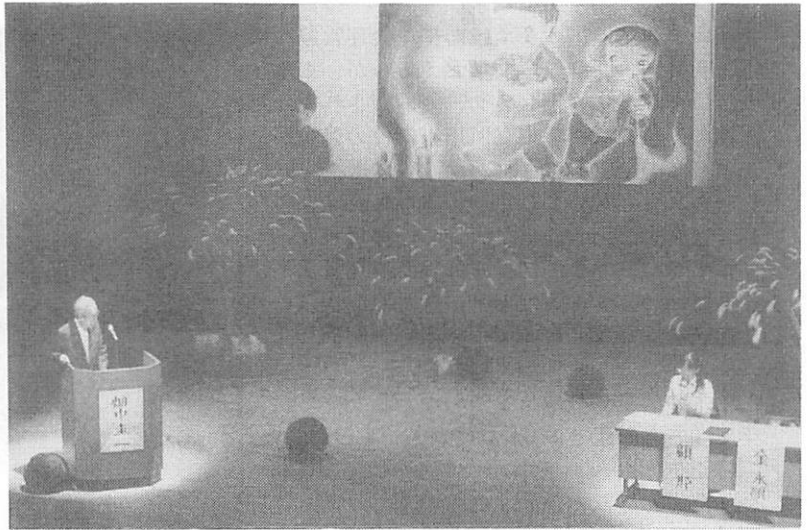
名古屋市東文化小劇場ホール 4月27日 13:30~15:00

中国や韓国の絵本を、それぞれの言語で味わおうという新しい試みです。まず最近出版された絵本『よあけまで』(文・曹文軒、絵・和歌山静子、訳・中由美子、童心社刊)をとりあげ、スクリーンに絵を映しながら原作の「守夜」を中国からの留学生顧那さん(名古屋大学大学院)に読んでもらいました。

つづいて、同様に韓国の絵本『アズキがゆばあさんとトラ』を韓国からの留学生金永順さん(梅花女子大学大学院)に朗読してもらいました。

コーディネーターは畑中圭一副会長。中国語の流れるようなリズムとやさしい響きを指摘しながら、絵本の味わい方についてもコメント。韓国の絵本については、擬声語・擬態語いわゆるオノマトペを生かした語りの美しさ・おもしろさを強調しました。

参加者からは、「朗読を音で楽しむことができました。それぞれの言語が持つ美しさや力強さを改めて



味わえました。」「意味は全然わからなくても言葉がきれいで、心地よかったです。」「こちよリズムの読み聞かせて心豊かになりました。」など、この試みを支持する声が多く聞かれました。

朗読とトークショウ 「いまアジアで読まれている宮澤賢治」

名古屋市東文化小劇場ホール

4月28日 13:00~16:00

賢治作品の朗読をまじえながら、四人のパネラーによるトークショウがしかた会長の司会でくり広げられました。まず、なぜ賢治の作品がアジアで広く読まれるのかについて、見解が述べられました。

賢治研究家の井上壽彦氏は「鹿踊りのはじまり」などを例に、賢治の自然とのかかわりについて語りました。彼の姿勢は単なる自然崇拜ではなく、自然の中に「仏」を見ていたのではないか——こうした姿勢ゆえに、賢治はアジアの人々に受け入れられやすいのであろうという指摘でした。

詩人の畑中圭一氏は、賢治の作品がアジア諸国で紹介されている現状(中国をはじめ5か国、1地域で計14冊の翻訳が出版されている)を報告。賢治の死生観・自然観、とりわけ自然との共生という思想がアジアの人々の共感と呼んでいるのではないかと指摘しました。

演出家・劇作家のふじたあさや氏は中国・韓国・日本の合作ミュージカルを演出した経験から、「アジア的共感」とは何かについて述べられました。三国の共通テーマは、西欧的近代に対して東洋的な自然との共生をどう実現するかであり、それに応えてくれるのが宮澤賢治だという提起でした。

子どもの本専門店代表の三輪哲氏は、読み手の側から見た賢治について述べられ、賢治の作品は児童文学という枠にははまらない幅の広さと奥行きがあること、30代、40代の女性に人気があるものの、若い人たちにも受け入れられるものを持っていると指摘しました。

次に欧米の近代文学とは異なる、賢治独特の物語の紡ぎ方について、見解が述べられました。井上氏からはファンタジーの入口を、日本の昔話の中に見出しているのではないかと指摘、畑中氏からは賢治の作品に見られる郷土性、伝承性を生かした素朴な語りという指摘がありました。ふじた氏は、賢治の劇作について触れ、彼がすぐれた演劇的感性の持ち主であったこと、彼の劇作はごった煮的なもので、いわば歌舞伎であったということ述べられました。

宮澤賢治の世界をアジアの視点で見るという試み、そして彼の語り口を西欧的なものとの対比で考察しようとしたトークショウ、少し展望が開けてきたところで残念ながら幕がおりてしまいました。

第1回 韓国・朝鮮児童文学セミナー

オリニの会主催 4月6日神戸で開催

オリニの会主催、オリニほんやく会運営協力による第1回韓国・朝鮮児童文学セミナーが、去る4月6日(日)神戸学生青年セミナーで開催されました。

会場の一角には西宮市立夙川小学校の児童が描いたトッケビの絵が展示され、翻訳書の販売コーナーも設けられました。20数名の参加で、少々さびしい感じはしましたが、セミナーの内容はたいへん充実したもので、多角的に韓国・朝鮮の児童文学に切り込んでいこうとする主催者の意図がうかがわれました。順を追って、セミナーの内容を紹介しましょう。

1. 絵本の朗読～OHCを使いながら

梁玉順さんの訳と朗読『子だぬき一家の春じたく』
(権正生作)

金朱美さんの訳と朗読『ポキポキもりのとけび』
(イ・ホベク作)

2. 実践発表

金永順さん「韓国絵本のよみあい——こうめ文庫での実践」

3. 代読発表

翻訳家卞記子さんの問題提起「新世紀、めんどりの『創氏改名』に出会う」

これは、「庭を出ためんどり」という韓国の作品の翻訳を依頼された卞記子さんが、初校の段階で主人公の名前「イブサク」を日本名「若葉」に、また「オンマ」を「ママ」に改めるように編集者から言われ、それを拒否したところ、翻訳者として不適当と言う結論を出されたという《事件》の経緯を説明し、これは《現代版創氏改名》ではないかとアピールされた文章が代読されたものです。

4. 童謡よもやま話

仲村修さんが、最近発売された日韓童謡CDを取り上げ、韓国の詩人や作曲家たちについて話されました。

5. ビデオ観賞

韓国と日本の子どもたちで作られた童謡ユニット「K&J」の活動記録。

6. 講演

仲村修さん「韓国児童文学と日本と在日と」
1990年代初めから日本における韓国児童文学受容の姿勢が変わってきたことを指摘された後、在日社会の児童文化・教育のありようについて批判と提言が行なわれました。特に、在日の子どもたちの中に入っていけない日本の児童文化について、今後は厳しく考えなければならないという提起には説得力がありました。

7. 発表

下橋美和さん「小学生に伝えたかったこと、感



じたこと」

箕面市の小学校に招かれて韓国の生活や民話について話をした際の感想が述べられました。翻訳者が子どもたちに送ることができるものとして、①異文化を示すこと、②いい原語の作品、③いい翻訳作品を挙げられたのが印象的でした。

8. 発表

斎木恭子さん「絵本と異文化トピック——メディアとしての絵本を考える」

鳥取短大で「環日本海論～絵本で読む韓国文化」を講じている斎木さんは、絵本を「異文化理解の契機を果たすメディア」としてとらえ、そのあり方を教材というかたちで実践しています。その実践報と研究の経緯についての発表でした。

9. 発表

李慶子さん「『はなぐつ』が生まれるまで」
最新作『はなぐつ』について述べたあと、在日の子どもに光を当てた作品が乏しい現実を直視すべきことを訴えられました。在日をとるまく状況は依然として厳しく、在日の子どもたちも、日本で生きていくことの苦しさを否応なく体験させられている。ただ李慶子さんは、「在日児童文学」というカテゴリーには疑問を投げかけます。創作の始まりはいつも「なぜ？」からだからです。

10. 発表

きどりのこさん「文化の対等性と双方向性を考える——韓国・朝鮮と日本をつなぐ児童文学」

江戸時代の儒学者雨森芳州が、今日言うところの《文化相対主義》の考えを持っていたことに触れながら、私たちが文化の相対性や双方向性ということを具体的なかたちで実現していかなければならないということを強調されました。

砂漠の物語

(郭雪波著 松瀬七織訳 福音館書店刊 1600 円)

成 實 朋 子

本作は「砂漠のオオカミ」「砂漠のまつり」「砂漠の吊い」「砂漠のキツネ」の四つの短編から成っている。いずれも中国・内蒙古の荒涼とした砂漠が舞台であり、そこで生きる人間と動物の営みが壮大なスケールで描かれている。いずれの作品にも、砂漠の賢人とでも言うべき老人と都会から来た若い研究者が登場し、若い研究者の熱意により、老人から謎が解き明かされていく。そこにオオカミや犬、キツネといった動物がからみ、やがて砂漠の猛威がおそいかかる…。全く別々の四つの物語であるが、読んでみると、やがて読者の心の中には、一つの砂漠の物語が出来上がっていくのではないだろうか。

魅力の一つは、老人の描かれ方にあるであろう。「砂漠のオオカミ」に登場するチンタカ老人は気難しい猟師であるが、娘と孫に対する溢れんばかりの愛情を内に秘めており、孫を連れ去った雌オオカミの退治に命をかける。「砂漠のまつり」のシェアンヤンは、シャーマン仲間のホーイエへの禁じられた恋を胸に秘め、砂漠にアカキビを植え続ける。「砂漠の吊い」のユントンは、かつて僧侶であったため迫害されたが、ただ一人都会から来た友人パイハイ、そしてともに飼った白犬との思い出に生きる。「砂漠のキツネ」の砂おやじは、人と交わらず、ひたすら砂漠と砂漠に生きる生き物を楽しみ、守り続ける…。いずれの老人も知識にたけた仙人のようでありながら、心の中にはどうしてもなく人間らしい情愛と解決できない思いを秘めている。きびしい運命を甘受しながら、抗いながら生き続ける登場人物たちの姿に勇気づけられるような思いがする。

またそのような人間達の営みを嘲笑うかのように、時に猛威をふるい、時にあたたかく存在する砂漠こそが、この物語の真の主人公と言えるだろう。作者は蒙古族の作家であり、よく環境保全関係の文学シンポジウムに出席しているためか、砂漠の描写は的確である。訳文もまず手堅く、読ませるが、あとがきが無く、作者や訳者の紹介もあまりに簡略にすぎため、この作品を取り巻く状況がさっぱり分からず、読後に不満が残る。海外の作品を読む時に、我々は少なからずの情報をあとがき等から得るわけであり、作品中に生じた疑問がそこで解消されることもままある。よく知られている作家や作品ならともかく、このような作品の場合は、テキストや原題はどのようなものかといったことも含めてきちんと説明するのも、翻訳者としての義務だと思うのだがどうだろう。

仲村 修著

朝鮮初期少年運動（1919～1925）

と児童文学

(『訪韓学術研究者論文集』第2巻 財・日韓文化交流基金)

畑 中 圭 一

近代朝鮮児童文学は、1919年3月1日の3・1独立運動以後に成立し、民族の再生をめざす民族指導者たちと民衆が呼応する民族運動のなかで育まれたというのが定説である。その民族運動とは農民運動、女性運動、青年運動、さらにその青年運動から派生した「少年運動」であった。少年運動は、具体的には天道教をはじめとする各種宗教団体とボーイスカウト、並びに全国的組織をもたない地方の少年会による活動で、民族的自立の維持と社会参加に大きく寄与したとされている。活動内容としては、講演会、童話（口演）会、歌劇会、オリニナル（子供の日）行事、各種スポーツ、水害救助活動、早起き会などで、児童文化の観点からはきわめて重要視すべきものであった。

ところが、この少年運動についてはこれまで歴史学からのアプローチはあったものの、児童文化の視点での調査・研究は皆無に近かった。仲村修氏のこのたびの調査・研究は、そういう現状のなかできわめて意義深いものである。しかも、個々の少年会の活動については、韓国においてもそれを記録した基礎資料が公表されていないために、仲村氏は当時の新聞・雑誌に直接当たって調べると言う方法を探らざるを得なかった。

今回は1919年から1925年までの調査であったが、仲村氏の行った調査件数は関連項目も含めて約2300件ということである。現地での新聞・雑誌資料の克明な読み取りによって具体的な生きた資料（バックデータ）が収集されていることと、それら新しい資料に基づいて論考が進められていることとによって、たいへん読み応えのある論文となっている。仲村氏の資料収集への熱意と努力に敬服する次第である。なお、少年運動はやがて弾圧を受けることとなるが、仲村氏は官憲や学校当局等から加えられた、そうした弾圧の実態についても詳細に調査し、それを紹介している。韓国における少年運動について児童文化の視点で行なわれた実証的考察として、高く評価したい。

なおこの書の巻末には、当時の少年運動の中で実施された口演童話、歌劇、童話劇、児童劇、童謡舞踏の演目一覧が資料として提示されている。非常に興味深い資料であり、これらも仲村氏の労作と言ってよからう。

モンゴルで活動する人たち

童謡詩人・ハーモニカ奏者の

もり・けんさん

大阪府和泉市在住のもり・けんさんは、童謡詩人として『ぎんなん』などの雑誌に作品を発表するとともに、ビクターや小学館から童謡の新曲を発表しております。この4月にも、もり・けん作詞の新曲2編「明日に向かって」（田中星児作曲・歌、ビクター）と「ロックラッセーラ跳べ跳べハネト」（夏原あきみち作曲、阪本つとむ歌、ビクター）とが発売されました。またミュージカル作家として「緑の星」「不思議の国のアリス」などを発表、(財)すぎのこ文化振興財団によって全国を巡回公演中です。絵本作家としても『あいさつがきれいな王さま』（あべはじめ絵、ひかりのくに）『あいうえお』（深沢邦朗絵、ひかりのくに）ほか5点の作品を発表しております。



もりさんはまた、ハーモニカ奏者として日本の童謡や叙情歌のコンサート活動を国内だけでなく、中国、モンゴル、フィンランドなどでも展開、童謡の普及に努めています。なおもり・けんさんのお父さんは1991年世界ハーモニカ・チャンピオンになった吉森正隆氏です。親子二代のハーモニカ奏者というわけです。お二人の演奏を収めたCDも発売されています。例えば『春夏秋冬 FOUR SEASONS IN JAPAN パート1～ハーモニカで奏でる もり・けん童謡の世界～』は赤とんぼ、十五夜お月さん、紅葉、たき火、など全25曲の童謡・唱歌が収められています。

(申込み等はFax 0725-44-2734、またはE-mail: mori-ken@land.linkclub.or.jpへ)

もりさんは毎年モンゴルを訪れてさまざまな文化交流を行い、国内では「モンゴル切り絵展」「モンゴル児童画展」や童謡コンサートなどによるモンゴル文化の紹介に努力を重ねておられます。さらに、きびしい生活を強いられているモンゴルの子どもたちを支援する活動にも取り組んでいます。すなわち、
《モンゴルの子どもにみなさんのお心を。

日本円1000円が1か月の食費になります。》
という呼びかけで、モンゴル支援金を募っています。支援金の窓口は次の通りです。

◆郵便振替 00980-3-12013

加入者名「国際援助係」

◆銀行口座 三井住友銀行 中之島西支店

普通3408867 国際援助係

なお、これまでもりさんと共にモンゴル旅行をした人たちの文集『ありがとう 草原の人たち』がこ

の4月出版され、好評を博しております。申込みは上記E-mailで。

馬頭琴

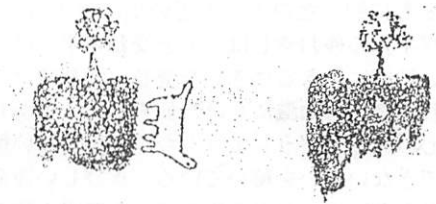
もり・けん

馬頭琴が響く
稽古場のすみからすみまで
低い音だがしっかりした音で
モンゴルの馬たちの歌が
聞えてくる

古老の手による
その響きは
私たちの心の奥底までも
侵入ってくる

束ねた馬のたてがみから
発する音だから
モンゴルの馬たちの
歌が聞えるのだろうか

馬頭琴が響く
稽古場のすみからすみまで
低い音だがしっかりした音で
モンゴルの馬たちの歌が
たしかに聞えてくる



韓国の少年少女小説『庭をためんどり』の翻訳問題、無事解決

仲村修さんからのメールで、この翻訳問題（4頁の「韓国・朝鮮児童文学セミナー」の紹介記事3.を参照）が解決を見たという連絡が入っています。

すなわち、平凡社が下記子さんに謝罪し、もう一度翻訳者としてお願いし、主人公名も原作通り「イブサク」でよいという提案があったということ。いずれ平凡社から関係者に正式回答が送られるということです。

なお仲村さんによると、韓国ではこの数ヶ月、『庭をためんどり』はもう日本では出版されないという噂が流れ、原作者もそう信じていたということですから、この問題がすっきりと解決すれば、いろんな意味で喜ばしいことです。

稲田善樹さんからの便り

【第4号でご紹介した稲田善樹さんはモンゴルとの文化交流に尽力されていますが、このたびは、モンゴル児童文学界の代表ダッシドンドクさんに、しかた・しん会長からのメッセージを届けてくださいました。その稲田さんからの便りを一部紹介します。】

今度のモンゴル訪問も印象深いものになりました。参加した人たちは自分の関心をもつものに参加し、交流して、モンゴルをより身近に理解することができたようです。特に音楽を学ぶ子どもたちの伝統的な楽器を使っの演奏は、モンゴルの雄大な空と草原を連想させ、駆け抜ける馬のいななきや蹄の音を感じさせて感動的でした。また、社会問題になっている孤児たちの施設も訪問し、モンゴルのかかえる問題の深刻さを考えさせられました。

ダッシドンドクさんにお会いしようとしたのですが、お父さんが緊急入院されたため、お会いできませんでした。とても残念です。おみやげに大田大八作の絵本『赤いこうもりがさ』をこつづけて帰ってきました。しかた会長のメッセージも届けました。今度のアジア児童文学大会が東北アジアの人々の真の友好と親善に役立つだろうと確信しております。

しかたさんの「国境」、探して読んでみたいと思います。私は旧満州四平街で生まれたものですから興味があります。

参加される皆さんによりしくお伝えください。

しかた・しん会長のメッセージ

ダッシ・ドンドクさん

ようこそアジア児童文学大会へ！

おいでを心から歓迎します。

私は自作の長編児童文学「国境」を書くために、1980年ごろ2回ほど、あなたの国を訪ねました。1回目はシベリア鉄道を通してでした。ウランウデからあなたの国に入ると、暗い荒涼としたシベリアの風景が、緑の草原に変わっていくのを深い感動の中で眺めました。

2回目はウランバートルまで空路でした。白ピンクの花が咲き乱れる草原の夏の風景や、パオでの暮らしては今でも忘れられません。本当に素敵な思い出でした。

大連での、あなたとの出会いをととても楽しみにしております。では、その日までお元気で。

アジア児童文学日本センター会長
しかた・しん

風のたより

仲村 修さんから

みなさん、お元気ですか。西宮の風のたよりをお届けします。

おとつい神戸市立中央図書館に行ってきました。

(週1回、この図書館のなかにある韓国・朝鮮専門図書室「青丘文庫」にでかけています)かえりがけにひょいと玄関右手の児童書コーナーの展示棚を見ると、どうも見かけたような本がおいてありました。よく見ると、なんと拙訳の本や「ほんやく会」の仲間間で訳した本、東京の卞記子さんの本などがおいてあります。うん？コーナー名を見ると「韓国・朝鮮の子どもの本を読んでみよう」とありました。小生は感激して、しばらく言葉を失いました。

ワールドカップのいい意味での影響が韓国・朝鮮児童文学翻訳紹介分野までおよぶことはないだろうと考えていましたが、少なくとも神戸では外れました。5月17日から7月15日まで展示するそうです。借りたい人はこの棚からも借りることができます。「最近よく借りていきます」と担当者はおしえてくれました。(小生は「ほんまかいな」と懐疑的なのですが、)企画が終わって、また担当の人に、借り出しベスト3などふくめて聞いてみたいと思っています。みなさんのお住まいの地域でこんなことがもしあれば、教えてください。

せんだって、通訳のアルバイトがあって、韓国の戦闘的な民主労組と日本の労組の交流会(神戸)に出ました。(年2回、もう4年参加しています)神戸の労組の顔なじみもちょっとでき、今回は最後の飲み会で場違いにも翻訳児童書を紹介しました。すると、持っていった8冊が全部売れました。付き合いで買ってくれたという感じではありませんでした。仕事と組合活動と家庭で忙しい人びとは、韓国に関心はあっても、きっと書籍など手にする時間がないことでしょう。まして翻訳児童書でありますから。しかし目の前にあれば関心を持ってくれます。

なにもかもすれちがい、食いちがい、かけちがった日本と韓国というべきか。そのなかのマスコミの目からもずれ落ちた分野の仕事は軌道にのせることはやはり大変ですね。(ここで「軌道にのる」というのは、卑近な本のたとえで恐縮ですが、せめて本を出せば再版、3版の出る程度の売行きと考えてください)しかし何か方法はあるのではないか、いま西宮の風はワールドカップな風にちょっとあたりながら考えています。(2002.6.28.)

新刊紹介

サンサン

曹文軒作 中由美子訳 和歌山静子絵
(2002年6月30日 てらいんく刊)

現代中国児童文学のリーダーのひとりである曹文軒の長編「草房子」の翻訳です。昨年来、出版が待たれていたのですが、ようやく刊行されました。

1960年代、江蘇省の水郷地帯の農村を背景に物語は展開されます。主人公のサンサンは、油麻地小学校の校長の息子で、鳩のだいすきな小学校4年生。彼が6年生を終えるまでの、さまざまな人や事件との出会いが物語の軸になっています。サンサンは「とっぴなこと」を思いついて、「人の意表をつく行動」に走り、しかも「何事も恐れない」という少年です。茶棚を勝手にこわして鳩小屋に改造したり、蚊帳を魚網に使ったり、あるいは父親が大事にしていた賞品のノートを持ち出して使ったり、とにかく思いついたらすぐ実行するという行動力は抜群です。

しかし、単なる腕白坊主ではありません。いたずらもし、喧嘩もするが、自分をとりまくいろんな人びとに共感し、時には援助の手をさしのべる《優しさ》の持ち主でもあります。いじめにあって転校してきた紙月（ジューエ）へのさり気ない心配り、学校建設のために自分の土地を追い出されたチンばばへの同情、叔父の家に養子としてもらわれてきた細馬（シーマー）を暖かく見つめる目、ライバルのシャオカンとのやや屈折した友情……。いずれにもサンサン少年の優しさがにじみ出ています。

聡明で、感受性の鋭いサンサンですが、彼にもよく理解できない世界があります。男女間の愛情です。担任のチアン・イー Lun 先生とパイ・チュエの間の恋文運びを喜んでやっていたサンサンですが、自分のミスがあったとはいえ、二人の間がこじれて芳しくない結末になったことは、彼の理解を越えていたのです。彼はあくまでも《少年》であったのです。

物語の最後、逆境をのり越えてたくましく成長したシャオカンとは対照的に、サンサンは奇病のルイレキに苦しみ、死線をさまよいます。病気がなおり、サンサンは中学に合格しますが……。 「サンサンは死ななかつた。けれど、サンサンは、一度死んだような気がした。」 作者はこう書いています。伸びやかではつらつとしていたサンサンの少年期が終わり、彼は大人の世界に一步踏み込んだのでしょう。

447頁の長編ですが、訳文もなめらか、この魅力的な少年サンサンと行動をとともにしていくと、一気に終わりまで読んでしまいます。日本の子どもたちに広く読んでほしい作品です。

(畑中圭一)

李芳世さん おめでとう

第3号で李芳世さんの詩集『こどもになったハンメ』（遊タイム出版）が紹介されましたが、この詩集で李芳世さんは、日本児童文学者協会の第6回三越左千夫少年詩賞・特別賞を受賞されました。おめでとうございます。益々のご健筆をお祈りします。

『小さい旗』115号

北九州市八幡東区尾倉3-7-10
水上方 小さい旗の会

<中国児童文学作品>

雪山の女神……………姫 尼作・楽 天絵
水上平吉訳

ハマグリ六郎の船……………周 鋭作・徐建国絵
馬場与志子訳

<中国語に翻訳されたみずかみかずよの詩>

「ふきのとう」「燃える樹」「めばえ」「金のストロー」の4篇

絵本から日本と韓国を見る

8月10日 14:00

大阪市立両国人権文化センター

キム・ヨンスン（梅花女子大学院）と畑中圭一のコンビで、韓国の絵本をハングルで楽しみ、併せて日本の絵本も楽しむという集いを行ないます。

韓国の絵本は「アズギがゆばあさんとトラ」「ポキポキ森のトケビ」「ソリちゃんのチュソク」をとりあげ、日本の絵本は「かにむかし」と「じごくのそうべえ」をとりあげます。

あとがき

畑中圭一

2004年の第7回アジア大会に向けて、本格的な動きがはじまりました。あと2年間うまく準備が整うのだろうかという不安もありますが、ここで後戻りするわけにはいきません。ただ前進あるのみです。会員の皆さんには特にこれからいろんな面でご協力をいただかなくてはなりません。まずは会員を増やすことにご尽力願います。会員一人が一人の新入会員を獲得することで、会員は倍増します。よろしくお願ひいたします。

この号は4月に名古屋で実施した「アジア子どもの本まつり」の実施報告とモンゴルに関わる活動家の紹介にポイントをおきました。毎月申し上げているのですが、会員の皆さんからの情報をお待ちしております。e-mailで連絡いただくのがいちばんありがたいです。その場合、できればwordで、添付送信してください。 hatanaka-kidu@par.odn.nc.jp